

掌編

# 遠い日の 奇行

土田清十郎

## 遠い日の奇行

---

あの日の出来事は、今でも忘れることができません。今思い返してみても、あの瞬間の戦慄が、生々しく私の体に蘇るのです。

その日、私とK君は、神社の敷地内にある大きな木に登って遊んでいました。K君の木登りは見事なもので、私が苦勞して登った場所まで、難なくスルスルと登ってきました。私は、素直にK君の木登りの技術を称賛しました。

「もっと上まで登れるよ」

K君はそう言うと、さらに上を目指して登り始めました。

K君は運動神経もよく、お調子者で、クラスのみんなから慕われていました。私もK君と遊ぶのは好きでした。ただK君には、調子に乗りすぎるという欠点もありました。

その日も、私の称賛に気をよくしたのか、かなり高い所まで無理して登ってしまいました。私はK君に、怖くないのか、と聞きました。

「ぜんぜん」

K君はそう言うと、片手で木の幹につかまり、その場でピョンピョンと跳ねて見せました。私は内心ひやひやしましたが、ここでもK君を褒めるようなことを言ってしまいました。

私は一度木から降り、下からK君を見上げました。K君は木の上で手を振っています。K君がいる場所は、建物なら三階程の高さがあったかもしれません。私は改めてK君の勇敢さに舌を巻きました。

「ここから飛び降りるよー」

K君はそう言いました。私は最初、K君の言っていることの意味がわかりませんでした。

「飛び降りるー」

K君が再び言いました。K君が言ったことの意味を理解すると、私は目の前がクラクラとするのを感じました。K君が立っている高さを、自分の目線で想像してしまったからかもしれません。

私はさすがに、それはやめろ、と言いました。この高さから飛び降りて、無事で済むとはとても思えませんでした。K君は、黙ってその場にしゃがみ込みました。下をじっと見えています。私は、心臓が胸から飛び出しそうでした。咄嗟にクッションのような物を探すという機転は利かず、ただただパニックに陥っていました。

その後、K君に動きがあるまで、どのくらいの時間が経過したのでしょうか。私にはとても長く感じました。

K君は、その場ですっと立ち上がりました。

「やっぱりやめるー」

K君は、照れたような表情でそう言いました。私は心から安堵しました。それと同時に、照れたような表情のK君に、今まで以上の親しみやすさと好感を覚えました。

K君がその場から降りようとした時でした。K君の足元の枝が、パキッと乾いた音を立てました。次の瞬間、K君の体は勢いよく地面に向かって落下していきました。

さて、私の話はここでおしまいです。昔話にお付き合いいただき、どうもありがとうございました。

え？続きが気になりますか？いえいえ、話はあそこで終わりですよ。みなさんの興味を引く話は、本当にあそこでおしまいです。なぜかって？K君の体が落下する瞬間が、この物語のクライマックスだからです。

クライマックスはあってもオチがない？

……う～ん、困りましたねえ。オチ……オチですか。後悔するかもしれませんよ？

私のような話好きにとって、聞き手の想像力は最大限に利用しなければなりません。K君の体が落下した直後、みなさんの中にいるK君はどうなったのでしょうか。ふふふ。

先日、K君とお酒を飲んだ際、

「あの時は死ぬかと思った」

と、大声で笑いながら、ビールをがぶがぶと飲んでいましたよ。

おわり